

クルト・ヴォルフ出版社と表現主義

宇 京 早 苗

Resümee: In diesem Beitrag werden die folgenden Punkte behandelt, um die Tätigkeit und Geschichte des Kurt Wolff Verlags vorzustellen und dessen Einflüsse auf den Expressionismus klarzumachen: I) die Vorstellung der Verleger, die sich für den Expressionismus engagierten, II) Wolffs verlegerische Zusammenarbeit mit Ernst Rowohlt in Leipzig, III) Wilhelm Weinstube als dichterisches Zentrum – Besuch von A. R. Meyer und F. Kafka, IV) Freundschaftsbund von Verlegern, Lektoren und Dichtern – Äußerung des „Wir-Gefühls“, V) Anlaufstelle für die Herausgabe expressionistischer Literatur, VI) Abbruch der Zusammenarbeit zwischen Rowohlt und Wolff – Entstehung des Kurt Wolff Verlags, VII) Programme des Kurt Wolff Verlags im Jahre 1913 – Herausgabe des Jahrbuchs „Arkadia“ und Gründung der Bücherei „Der jüngste Tag“. Zur Geschichte des „Jüngsten Tages“ (Entstehung, Programm, Wachstum und Wirkung, Auflagenhöhe, Sammelkraft und Mitwirkende, Konkurrenz und Nachahmung, die effektive Beziehung zur Monatsschrift „Die Weissen Blätter“, VIII) verlegerische Tätigkeit des Kurt Wolff Verlags während des ersten Weltkriegs – Herausgabe des Almanachs „Das bunte Buch“, IX) über die zwei Ausgaben des Almanachs „Vom jüngsten Tag“, X) Herausgabe der Almanache in den Jahren 1917 und 1918/Nachlassung des Expressionismus, XI) Beziehung des Kurt Wolff Verlags zum Expressionismus.

I) 表現主義の文学運動が始まった1910年頃のドイツには、フィッシャー、インゼル、ランゲン、ディーデリヒスなど、すでに世紀転換期に設立され、文学界に影響力をもつ大きな出版社が存在していた。こうした状況の下で新たに出版社を設立した出版人^{フェアレーガー}には、独特の創造力と確固とした出版理念をもった人物が多かった。これらの新参出版人には、ベルリンのA・R・マイヤーとH・F・S・バッハマア、ハイデルベルクのH・マイスターとR・ヴァイスバッハ、ライプツィヒのE・ローヴォルトなどが挙げられる。彼らは、資金もさほど潤沢にないなかで、若い無名の作家の作品や同人の間でしか読まれていなかった作品を世に送り出すという勇気ある先駆的な出版活動を行った。マイヤーは本来、自分の書いた詩を刊行するために出版社を設立したのであるが、やがて若い無名の作家の作品を刊行するために力を注いだ。バッハマアはまだ学生の身であった1911年にベルリンで出版活動を開始し、友人のJ・R・ベッヒャーの作品やラスカー＝シューラーの散文を出版した。そして、出版社をミュンヘンへ移してからは、初期表現主義の重要な雑誌である『Die Neue Kunst』や『Revolution』をも発行した。マイスターは1911年にハイデルベルクに設立した出版社から月刊誌『Saturn』を発行し、1912年には最新の文学の作品集『Flut』も刊行して、初期表現主義の文学運動に大きな影響を及ぼした。また、同じく1911年にハイデルベルクに出版社を設立したヴァイスバッハはE・ブラスの作品のほかに、ブラスが編集した雑誌『Die Argonauten』や表現主義の最初の抒情詩集として重要な意味をもつK・ヒラー編集の『Der Kondor』を刊行した。エルンスト・ローヴォルトは1909年にライプツィヒで出版社を開いたが、この出版社については、最初から活動に

加わっていたクルト・ヴォルフをも共に語らねばならない。つまり、本稿で詳しく述べることになるが、「エルンスト・ローヴォルト出版社」は、ローヴォルトとヴォルフの共同経営で成り立っていた。そして、1912年11月に両者の協力関係が破綻したあと、1913年以降その出版社は「クルト・ヴォルフ出版社」と改名して活動を続けたのである。

これらの理想に燃えた出版人のもとには、若い無名の作家が次々と集まることになった。その作家たちは、最初、数々の雑誌で作品を発表していたが、作家として自立し、世に認められるためには、作品を刊行せねばならず、彼らはそのために出版人を見出し、支援を受ける必要があったからである。

こうして出版人は、彼らが世に送り出す作家、発行する作品や雑誌を通じて、その時代の文学活動と深く関わることになった。そして、出版人の意志と活動は、当時の文学の発展と作用にも少なからず影響を及ぼすことになった。それゆえに、彼らの出版社が歩んだ歴史は文学史の重要な一部分をも形成し、彼らが支援した作家や刊行した作品は、同時代の文学的現象をも映し出すことになった。

II) ヴォルフがローヴォルトと出会ったのは、彼が1908年の秋から文学の勉強を再開したライプツィヒにおいてであった。その当時のライプツィヒは、A・キッペンベルクが経営する有名なインゼル出版社があり、また優れた技術を誇るドゥルグリーン印刷所もあったので、書籍や出版活動に興味をもつ者には非常に魅力のある都市であった。ローヴォルトはその時すでに、「エルンスト・ローヴォルト出版社」（以下、ローヴォルト出版社と略す）の名前で一冊の本を刊行し、出版人としての道を歩み始めていた。また、彼は自らの出版活動のほかに、このライプツィヒでドゥルグリーン印刷所が発行を請け負っていた『愛書家協会誌』の編集にも（キッペンベルクの依頼を受けて）携わっていた。こうした関係から、ローヴォルトはドゥルグリーン印刷所の建物の前半分に自分の住居と並べて出版社を構えていた。

他方、ヴォルフも、まだ学生であった1908年に（ゲーテの友人で「疾風怒濤」の旗手であった）ヨーハン・ハインリヒ・メルクの著作集やアデーレ・ショーペンハウアーの未公開の日記を編集した経験をもっており、出版活動には少なからず興味を抱いていた。それゆえに、二人の出会いは、たちまち出版活動で実りある協力関係を確立する方向へ発展した。当初、事業の主導権はローヴォルトにあり、ヴォルフは出資社員として資金面から彼を支えていた。すなわちヴォルフは、父親がボン大学の音楽史の教授を務める裕福な家庭の子供であったうえに、1909年に、J・H・メルクの子孫で、ダルムシュタットの化学工場主であったC・E・メルクの娘のエリーザベット・メルクと結婚したことによって、かなりの財産があったのである。しかし、高校生の頃から本の収集に熱心で、その頃すでに蔵書が一万冊ほどに達していたヴォルフが大学で文学を学び、ゲオルゲ=集団とも交流をもっていたことから、彼が出資のみの匿名社員の状態を超え出るのは、時間の問題だったようである。さらにまた、ヴォルフはライプツィヒの大学で詩人のハーゼンクレーヴァーと文芸評論家のピントゥスと知り合い、この二人を間もなくローヴォルト出版社の企画顧問として出版活動に加え入れた。

III) 1909年7月の或る日、ヴォルフはA・ケスター教授の講義のあと、当時十九歳だったハーゼンクレーヴァーをピントゥスに紹介し、二人をライプツィヒの市庁舎近くのヴィルヘルム・ワイン酒場に案内した。そこでは、学生や駆け出しの芸術家たちが毎日、昼の食卓を囲んでい

た。その集まりのなかにローヴォルトがいた。この時から、そのワイン酒場はローヴォルト、ハーゼンクレーヴァー、ピントゥスを中心として、ライプツィヒの若い前衛芸術家たちが集まる場所になった。最初のうちは、その三人のほかにローヴォルトによって児童劇を出版してもらったG・v・バセヴィッツ、文学好きの医学生P・ケラー、そしてG・ハイムやA・R・マイヤーの影絵を制作した画家E・M・エンゲルトもしばしば訪れていた。

このワイン酒場は、間もなくローヴォルト出版社にとって重要な意味をもつ場所になった。それについてピントゥスは次のように回想している。「それまで作品が刊行されたことのない作家が何人も、その酒場の常連だった我々によって見出され、世に紹介された。我々は作家を捜す必要などなかった。作家たちが我々のそばにいたのである。彼らは原稿を送ってきたこともあったが、直接、その酒場へ我々を訪ねてきた。その際、彼らは友達を伴って来ることもあった。その当時の『シュトゥルム』や『アクツィオン』を中心とした作家集団、1911年頃のミュンヘンの文学集団については頻りに語られたのに、ヴィルヘルム・ワイン酒場のことはほとんど語られたことがなかった。そこは、ドイツ語圏の国々の若い作家にとって出発地であり、のちに中心地、巡礼の地になった。そうした若い世代で、また彼らと親交があった年配の作家で、ベルリン、プラハ、ミュンヘン、ウィーン、西部ドイツの都市からライプツィヒへ来た者は誰も、このヴィルヘルム・ワイン酒場の昼の食卓でローヴォルト、ヴェルフェル、ハーゼンクレーヴァー、そして私に会えることを知っていた。(……) また1911年から1914年までは、夜にふたたび古いレストラン〈デア・カフェバウム〉に集まるのが我々の儀式のようになっていた」¹⁾と。

実際、このヴィルヘルム・ワイン酒場には多くの出版人や作家が訪れ、交流と活動を広げた。たとえば、ローヴォルトの古い友人で、出版業の師でもあったA・R・マイヤーがベルリンからやって来た。その際、マイヤーはラスカー＝シューラーを伴って来た。そのほか、若い詩人ベッヒャー、表現主義の理論家K・ヒラー、オーストリアの詩人A・エーレンシュタインも来た。プラハからは、当地の詩人集団の中心にいたM・ブロートが来た。ブロートは、ドイツ文学とチェコ文学の仲立ちをしていたO・ピックを伴って来たこともあったが、1912年6月にはカフカと共に訪れ、カフカをローヴォルトとヴォルフに紹介した。これらの来訪者はみな、その後、ローヴォルト出版社と創造的な関係を築くことになったが、とりわけA・R・マイヤーとカフカはローヴォルト出版社の以後の活動に大きな影響を与えることになった。

A・R・マイヤー(1882-1956)は、1905年から五年間、ベルリンのヤンケ出版社で企画顧問として働いていたが、この間の1907年にその勤務と並行して自分の出版社を開いた。そして彼は、自作を出版する機会に恵まれない無名の作家たちに発表の場を提供するために、雑誌『Die Bücherei Maiandros』や抒情詩集『Ballhaus』を発行していた。しかし、彼が表現主義の文学と結びつき、その歴史に名前を留めることになったのは、表現主義の作品を廉価な叢書で世に紹介した『Lyrische Flugblätter』によってである。この十六頁ほどの小冊子の叢書は、1907年から1923年までに——その間、1914年7月から1918年末までは、編集部が閉鎖されたために刊行中止となったが——合計105点の作品を刊行した。そのうち表現主義の作品は、1910年8月刊行の12冊目から1914年秋刊行の48冊目までを占めていた。しかも、そのうちの17点は初期表現主義を代表する詩人の主要作品であった。そして、ベン、ゴル、ツェヒ、ヘルマン＝ナイセ、リヒテンシュタイン、レーオンハルトについては、作品がこの叢書で初めて世に紹介されたことから、この叢書は彼らの出発点として大きな意味をもっていた。そのの

みならず、この叢書が新しい文学潮流をいち早く紹介するという先駆的役割をも果たしていたことは、23冊目にプラハの詩人で表現主義の先駆者と見られていたハートヴィガーの詩集、24冊目にマリネッティの『未来派文学』、37冊目にアポリネールの『地帯』が収められていたことから明らかである。この叢書が以後に刊行された同種類の出版物に少なからぬ影響を及ぼしたことは、たとえば1913年から1914年まで発行された『Lyrische Bibliothek』にも窺い知ることができる。しかしながら、この『Lyrische Flugblätter』は、その六年後に刊行されたクルト・ヴォルフ出版社（以下、ヴォルフ出版社と略す）の代表的な叢書『Der jüngste Tag』に大きな影響を与えることになった。

つぎに、カフカは1912年6月29日にブロートを介してローヴォルトとヴォルフに出会ったが、彼は、その時の様子を次のように日記に記している。「ヴィルヘルム・ワイン酒場、中庭にある薄暗い店。ローヴォルト。若く赤い頬、鼻と両頬の間にじっとりと浮いた汗。まず腰から始まる体の動き。……ハーゼンクレーヴァー、小さな顔に現れる多くの陰影、加えて蒼味がかかった色合い。……ワイン酒場で毎日繰り返される一風変わった昼食会。レモンの輪切りを添えた大きく平らなワイングラス。『ベルリン日報』に寄稿していた、丸顔の太ったピントゥスは、その後カフェ・フランセでそのタイプ原稿の校正をする。(……) ローヴォルトは私の本の出版をかなり本気で考えている。出版人たち各々の義務とドイツ文学の現状に対する彼らの影響」と。このカフカの日記にヴォルフの名前は出て来ない。当時、ヴォルフは結婚していたこともあって、そのワイン酒場やカフェの常連に加わっていなかった。彼は若い妻と共に、ワイン酒場の常連とは異なる集団と交際し、洗練された富裕市民層の生活様式を保っていたようである。しかしながら、こうしたヴォルフの生活態度はローヴォルト出版社の仲間たちと創造的な調和を生み出し、その広範な活動に効果的な影響を及ぼしていた。なお、「ローヴォルトが出版を本気で考えている」とカフカが語った作品『観察』は、1912年11月——ちょうどローヴォルト出版社がヴォルフに譲渡されることになった時期——に、彼の最初の本として（通し番号を付した）愛蔵豪華本で刊行された。この本については、1912年11月18日の『ドイツ書籍販売商況新聞』に次のような広告文が掲載された。「現代の優れた若い詩人たちの活躍に注目している人々には、カフカは、『ヒューベリオン』やその他の雑誌で発表された短篇小説などによってすでによく知られた作家である。……この繊細で洗練された知性の最初の作品をここに紹介できることを喜ぶ。形式的に磨き抜かれ、内容的に感情と思考が深められた観察の手法によって、カフカはもしかしたらローベルト・ヴァルザーに匹敵するかもしれない。しかしカフカは、魂の体験の詩的変形に表れた本質的な相違によって、ヴァルザーとは異なる。(……) この作家とこの作品には、あらゆる意味で最大の関心が注がれることだろう」²⁾ と。無名の若い作家を世に送り出すというローヴォルトとヴォルフの目標が1912年までの出版活動で実質的成果を見たのは、このカフカの発見と、あとに述べるG・ハイムの発見においてであった。

IV) ローヴォルト出版社が設立された時から企画顧問を務めていたピントゥスは、その出版社の仲間たちが出発の時に抱いていた希望を次のように伝えている。「それは、我々の人生のうちで最も素晴らしい時代、もしかしたら最も幸福な時代であったかもしれない。我々の小さな集団と我々の所へやって来た多くの者たち。我々はみな自分たちと共に何か新しいことが始まったと感じていた。それが何であるか正確には掴めていなかったが、一つの同じ抱負が我々を結びつけていた。いずれにせよ、我々にはそれが何であるかはっきりとは分からなかった。

我々の刊行した本がいたる所に、ライプツィヒのみならず、ベルリン、ミュンヘン、ハイデルベルク、ウィーンにも現れたとき、それが何であるかが徐々に明らかになった。しかしながら、それはこの文学の時代を〈初期表現主義〉と呼ぶことになった文学史の一部分を成していたことである³⁾と。

ローヴォルト出版社の仲間たちを相互に結びつけていたのは、ピントゥスの言葉の随所に表れていた「我々=感情」(Wir=Gefühl)でもあった。そして、この連帯の感情は、とりわけ三人の企画顧問の友情を基に成り立っていた。ピントゥスが1912年11月16日にライプツィヒで開催された愛書家の夕べのために発行した『新ライプツィヒ文壇』には、ピントゥスの詩「我が友人たちに」とハーゼンクレーヴァーの詩「非感傷的な愛の詩」——この詩はのちに彼の詩集『若者』にも収められた——が掲載されていた。この二篇の詩には、彼らの文学活動を支えていた「我々」=集団の実態が次のように描かれている。「我々、明るく輝く彗星よりも速く、炎を上げて天空を駈ける者／(……)／我々、叫ぶ民衆の先頭に立ち、煽動の旗を振って進む者／(……)／我々、孤独のベールに幾重にもつつまれて身を震わせる者／(……)／我々、蜘蛛には怯え、戦闘には平気で出かける者／我々、寒風のなかで火床のように燃え、炎暑のなかで氷山のように凍える者／我々、この時代の厳しい領主、巷の情け深い娼婦／我々、賢明な老人、憤る青年、たわいない児童／我々、夜更けに忘れ去られたロマン語の文献やゲルマン、インド人の神秘の書を開く者／(……)／あらゆる時代の秘密を知る我々は、競技者のように強く、病んだ少女のように弱い／灯台である我々は、纏れた暗闇を貫いて光を放つ、立ち並ぶ塔へ、海へ、商店の群へ、愛の葛藤の場へ、どよめく都市へ⁴⁾。ハーゼンクレーヴァーもピントゥスの詩と同様の調子で次のように詠っている。「我々、集い合い、鳥の群を成す者／我々、駿足の白馬に跨って拳銃をぶっ放す者／(……)／我々、生きて自らを欺く者／(……)／我々、自らの千々に乱れた魂を犬のように吠え続ける者／我々、圧制者の夜へ松明を掲げる者／我々、すべての俗物を十字架に架ける者⁵⁾と。

ローヴォルト出版社の三人目の企画顧問であった詩人ヴェルフェルは、1911年末にアクセル・ユンカー出版社から刊行された彼の詩集に『世界の友』という表題を付け、人類の友愛を高らかに詠った。その詩集は、刊行されるや否や多くの読者を得、プラハ、ウィーン、ベルリンのカフェでは集まった文士たちの話題をさらった。カフカは、この詩集を読んだ時の感動を「昨日の午前中、私の頭は蒸気で飽和したような状態だった。その感動にそのまま気を失うほど引き込まれるのを一瞬、恐れた」と日記に記していた。その詩集のなかで、ヴェルフェルは友情につつまれた幸福な自分を「美しく輝く人間」と題して、次のように詠った。「ぼくは日光の降り注ぐ広場を巡る花馬車行列／女たちとバザーで賑わう夏祭り／ぼくの目は自ずと溢れ出る光輝で眩む／ぼくは芝生に腰を下ろし／大地と共に夕暮れのなかへ走って行く／おお、大地、夕暮れ、この世界に在るといふ幸福!!⁶⁾と。

ローヴォルト出版社の仲間たち、彼らと親交があった作家たちが相互にいかにか深い友情と感謝の念で結ばれていたかは、彼らが作品に付した献呈の言葉にも窺い知ることができる。たとえば、ブロートは『感情の高まり』の一部分をヴェルフェルに贈っていた。またハーゼンクレーヴァーは詩「捕らわれ男」を「クルト・ピントゥスに捧げて」書いていた。ラスカー=シューラーの『幻影・エッセイと物語』には「本書をクルト・ヴォルフに贈る」と記されていた。こうした友愛は、その当時、彼らがとくに父親との関係で（ハーゼンクレーヴァーの場合は、母親との関係でも）断念せざるを得なかった感情であるが、それを彼らは初めてローヴォルト出

版社の人間関係に見出すことができたのである。

V) ローヴォルト出版社が1911年頃までに刊行した作品は、シェーアバルト、ダウテンダイ、C・ハウプトマンの作品が主であった。これらの作家は、——問題視する人もいたが——当時、比較的円熟した作品を書いており、かなりの読者を得ていた。とりわけオイレンベルクの作品は1910年の段階で、ローヴォルト出版社が刊行した18点の作品のうちの半分を占めていた。この背景には、ヴォルフがオイレンベルクに関心を抱いていたという事実があったように思われる。すなわち、ヴォルフは、彼が1910年に企画した世界名作集（全17巻）の第7巻にオイレンベルクのソネットを収めたのみならず、オイレンベルクの戯曲を研究し、ポンの文学研究会でそれについて発表をも行っていたのである。

しかしながら、オイレンベルクやダウテンダイの作品の刊行は、ローヴォルト出版社が当初から温めていた企画を実現させるための基盤を造っていたにすぎない。すなわち、ローヴォルトとヴォルフは、その後間もなく「新しい文学を創作する若い世代を世に送り出す」行動を開始したのである。この行動の第一弾は、当時二十三歳だった無名の詩人G・ハイムの詩集を出版することであった。1910年11月初め、ローヴォルトはベルリンの雑誌『Der Demokrat』でハイムのソネットを読んだ。力強く斬新な表現に満ちた詩に感動したローヴォルトは、すぐにハイムに手紙を書いて、原稿を送るように依頼した。⁷⁾ こうしてハイムの詩は、1911年4月に『永遠の日』という表題でローヴォルト出版社から刊行されたが、その詩集は早くも翌年に第二版が発行されるほどの人気を博し、世間の賞賛と喝采を浴びた。これに続いてハイムの作品は、——彼が1912年1月16日にスケート中の事故で死去したあと——友人によって編集された遺稿集『生の影』（1912）と短篇集『泥棒』（1913）がローヴォルト出版社から刊行された。このハイム発見に関する逸話は、出版人ローヴォルトの迅速で的確な行動力、作品と作家に対する優れた評価能力を伝えるものである。

ハイムの詩集の刊行と、先に述べたカフカの『観察』の刊行は、それ以後のローヴォルト出版社の活動方針を定める重要な契機になった。すなわち、ローヴォルトとヴォルフがハイムやカフカと出会い、彼らの作品に見出したものは、「新しい世代」（neue Generation）や「最近の文学」（die jüngste Dichtung）によって創り出されていたその時代の精神にほかならなかった。ちなみに、neu や jung という語は1910年頃、次に見るように、雑誌名や論文題名などに頻繁に現れていたが、それらの語には同時代の文学的特徴を捉えるキーワードとして、固有の意義と価値が認められてもいた。たとえば、雑誌や年報の表題としては『Neue Jugend』、『Die Neue Zeit』、『Dichtung der Jüngsten』、『Das Neueste Gedicht』、また論文や作品の題名としては『Die junge Literatur in Deutschland』、『Von der jüngsten Literatur』、『Die Jüngsten der deutschen Literatur』などが挙げられる。

VI) ローヴォルトとヴォルフが若い無名の作家の発掘という目標に向かって走り始めたとき、二人の協力関係が壊れることになった。ローヴォルトは活力に溢れ、明朗な性格で、町の酒場で集い合うことを好んでいた。ヴォルフは高い教養があり、細やかな神経の持ち主で、控えめな性格であった。こうした対照的な性格ではあったが、共に1887年生まれの二人は、反発し合うよりも、むしろ補完し合い、互いに相手の長所を認め合っていた。実際、二人の対照的な性格は、ローヴォルト出版社の初期には、効果的な調和を生み出し、建設的に作用していた。

しかし、次第に二人は、経営方針、とりわけ財政に関して意見の相違を鮮明にし、多くの点で衝突と憤慨が生じるようになった。1912年11月、二人はついに三年半ほど続いた協力関係を最終的に断つことになった。ローヴォルトは彼の出版社をヴォルフに譲り渡し、ベルリンへ移って、最初はS・フィッシャー出版社の、次にはヒュペーリオン出版社の支配人になったが、戦争が勃発すると間もなく戦地へ赴いた。ヴォルフはローヴォルト出版社を譲り受けるために、五万マルクをローヴォルトに支払い、さらに製作中の本の費用と作家たちへの貸付金の合計五万五千マルクをも負担せねばならなかった。しかし、こうした財政問題を解決して、ヴォルフは1912年11月以降、ローヴォルト出版社の単独の経営者になり、企画顧問のピントゥスやヴェルフェルもそのまま彼のもとに残ることになった。そして1913年2月15日から、出版社の名前を「クルト・ヴォルフ出版社」と改め、新たに出版する本や増刷する本にその社名を記すことができた。この新しい出版社の標章は、ローマの伝説に登場する「ロムルスとレムスの双子の兄弟に乳を飲ませるカピトル丘の雌狼」を採り入れていた。この標章は、若い無名の作家を見出し、彼らを育て、後世に通用する作家として世に送り出そうという出版人ヴォルフの気高い目標を表現したものであった。その後間もなくこの標章を付して刊行された本は、ハーゼンクレーヴァーの詩集『若者』とヴェルフェルの詩集『我々は在る』であった。

VII) 1913年の春にヴォルフ出版社が掲げた開始のプログラムは、同時代の新しい文学の出発を告げるファンファーレの高鳴りと言うことができた。ヴォルフの周りに集まった作家たちは、彼の出版社の名前を付して新しい文学を世に広める役割を果たすことになった。以下では、ヴォルフ出版社の非常に広範な出版活動のうち、おもに表現主義の文学運動と関係し、その発展に影響を及ぼした活動と出版物とを紹介したい。

1) 1913年春、ヴォルフ出版社の初の^{ヤールブーフ}文学年鑑『Arkadia』が、M・プロートの監修で発行された。これはボヘミアとオーストリアの作家の作品を収集した一回限り発行の年鑑であり、その内容は戯曲、物語、抒情詩の三部門に分類されていた。この年鑑について、プロートは「まえがき」で次のように述べている。「我々のこの年鑑はもっぱら、また純粋に時代の文学的形成力を、しかも文学の全領域において働かせようという企てである。さまざまな作品が『Arkadia』のなかに収集されていることによって、各作家の内的な共同体、目に見えぬ教会が与えられている。しかし、何らかの集団を形成することなど些かも考えておらぬし、詩人相互の個人的一致だとか、詩人たちここに提示された方針との一致などは推し測られることも要求されることもなかった。文学のもつ超世俗的な要素を提示する賛歌的な力は——それに本来、備わっている純粋な偉大さによって人間のために働くには——作品以外の要素も集団への関心も必要ではないということを我々は確信している。これと同様に、各詩人も——連帯を推し進めることがいかに魅力的であろうとも——固有の魅力と個人のすべてにおいて最もよく価値が認められ得ると思う⁹⁾」と。これについて、とくに「時代の文学的形成力を文学の全領域において働かせよう」というその年鑑の目標、そしてまた「集団の形成、詩人相互の個人的一致、詩人と年鑑の方針との合致を要求しない」態度は、ヴォルフの出版理念と一致していた。さらに、この年鑑をデームルに送った際にプロートが語った次の言葉は、その発行目的と意義をより明確に表わしている。すなわち、「文学のカオスが深まる一方の状況で、その作品の純粋さで卓越していると思われる、ほとんど無名の若い詩人たち数人を一括して世に紹介しようと思ったのです。この『Arkadia』は、現代の若者の^{たち}質の悪い自負心を強調する内面的分裂と

絶望とに敵対し、ベルリンのコーヒーハウスから蔓延する過激主義の或る種の荒涼とした慣習に敵対するものです」⁹⁾と。

2) 『Arkadia』が発行されて間もない1913年5月に、叢書『Der jüngste Tag – Neue Dichtungen』が刊行されることになった。この叢書については、早くも1925年にA・ゼルゲルが「表現主義の〈新しい運動〉のために、ヴォルフは非常に力を尽くした。彼は叢書『Der jüngste Tag』によって、新しい芸術運動を推進していた作品を提示するという最初の試みに成功した」と賞賛した。実際、この叢書はヴォルフの出版活動の記念碑としてのみならず、表現主義の文学の成果の集積としても後世に残ることになった。ちなみに、この『Der jüngste Tag』に収められていた作家のうち14名が、表現主義を代表する詞華集であるピントゥス編の『人類の薄明』に収められることになった。また、その叢書は、H・シェフラーも述べているように、「その時代を表現したものであり、1910年から1920年までのドイツ文学の総体を映し出していた。実際、そこには、ヴォルフ出版社に所属していなかった作家も数多く収められていた」¹⁰⁾のである。それゆえに、その時代の文学の状況と出版活動の実態を知る意味でも、以下では、この叢書について、成立、プログラム、発展と影響、発行部数に表れた普及状況、収められた作家と作品の分析、他の叢書との競合状況、模倣の出現などの点から考察してみたい。¹¹⁾

a) 成立

『Der jüngste Tag』は、最近の文学（die neueste Dichtung）を収集することを目的としていたので、創作を開始して間もない若い作家の作品が数多く収められていた。だが、これと同時にまだほとんど紹介されていない外国文学も収められていた。

この叢書の刊行と表題が決定された経緯については、ピントゥスが次のように説明していた。「1913年の早春の或る晩、ヴォルフとヴェルフェル、ハーゼンクレーヴァーと私はバーにいた。そのとき、すでに好評を博していたインゼル叢書に対抗して、若い作家、あるいはまだ世に知られていない作家の作品を収集した小さな文学叢書を刊行する話がまとまった。では、その叢書の表題はどうでしょうか？ テーブルの上にヴェルフェルの新詩集『我々は在る』の校正刷りがあった。そして、鉛筆で書き込みがしてあった頁の最終箇所にも〈O, jüngster Tag!!〉という詩句があった。これによって、若い作家たちの最新の文学を紹介する叢書は『Der jüngste Tag』と名付けられ、それは多くの作家を文学の広い領域へ送り出すことになった」¹²⁾と。この『Der jüngste Tag』については、旧時代の終わりや新時代の始まりを意味する「最後の審判」と訳されることもあるが、刊行の趣旨から判断して「最近、成立した最新の文学」を表していると考えべきだろう。つまり、「jüngst」は、同時代の文学的傾向を論じたピントゥスの論文の題名「Zur jüngsten Dichtung」にも表れていたように、その意味に「neue Generation」、「die jüngste Generation」を包含していた。さらに、この叢書と関連してヴォルフ出版社から刊行された年鑑^{アルマナク}の表題が『Die Neue Dichtung』、『Der Neue Roman』、『Das Neue Geschichtsbuch』というように——Neuを大文字書きにして——「最近」、「最新」を強調していたことを考え合わせるべきだろう。実際、この『Der jüngste Tag』の刊行については、ヴォルフも1913年5月にF・ブライに宛てて「私の出版社をより明確に現代文学へ向かって発展させてゆこうと思います」¹³⁾と書いていたのである。

b) プログラム

この叢書の刊行が始まる前の1913年4月中旬に、ヴェルフェルは広告文で彼が希求する詩

人像とその使命について次のように述べていた。すなわち、「新しい詩人は知るだろう。彼の詩は本に収められた一つの文章群ではなく、彼の偉大で同情的で好意的な生、あらゆるものに関与する生の一部であることを、そうした生の、弱く得も言えず細い滴であることを、震動する世界を自ら感じ取る心の閃光であることを。……この小さな叢書では、真の、真の詩人が、つまり表現と実行がすでに混濁と眩惑であることに止めどなく血を流して心痛める人間が歓迎されてあるように」¹⁴⁾と。さらに、1913年秋に書籍販売者と読者に向けてヴォルフとピントゥスが書いたと思われる案内書では、この叢書の文学的意義と刊行目的が次のように表されていた。『Der jüngste Tag』は、我々の時代にとって特徴的で、未来を指し示していると思われる比較的若い詩人の小作品を収集したものである。『Der jüngste Tag』には、多数の処女作が収められるが、すでに認められている作家の新作も収められるだろう。『Der jüngste Tag』に収められている作品は、生とは無縁の文士文学からも大衆に人気のある通俗文学からも遠く隔たっている。この叢書の作品からは、我々の時代の生活感情と世界感情——歓喜、苦痛、感激、敏感な神経、勢力^{ベワ}——が溢れ出るはずである。人間の感情を簡潔な形式で表現し、それによって人間の感情を目覚めさせるはずである。我々の時代の最も特徴的かつ集中的な詩人の表現手段は抒情詩に表れているので、『Der jüngste Tag』では、おもに抒情詩の小品を刊行するが、他方、重要な綱領や散文の小作品も刊行される予定である。『Der jüngste Tag』は、ドイツの詩人に限定せず、外国の文学作品をも刊行する。それによって、我々の時代のあらゆる国の文学に（造形芸術におけると同様に）共通する要素がいくつも存在することを示すことができるから。（……）この企画はもはや各雑誌の同人的集団を考慮していない。（……）これは我々の時代の共通の体験から生まれた、きわめて若い詩人たち（die jüngsten Dichter）の創造のシリーズである。この叢書は今から不定期に刊行されるが、価格は仮綴じ判で80ペニヒ、製本判で1マルク50ペニヒに設定されている。（……）『Der jüngste Tag』は、集団、交友関係あるいは敵対関係による限定も、また国や都市による限定もない。『Der jüngste Tag』は、言葉が映し出す事柄を忠実に受け取り、時間的なものの勢力を超えて永遠の存在を約束する必然的な事象をすべて収集しようと試みるであろう」¹⁵⁾と。

表題『Der jüngste Tag』が標語のように随所に折り込まれた、この広告文は、この叢書のさまざまな特徴を簡条的に列挙して読者に示している。数々示された理念のうち、とりわけ価格を低く設定して、できる限り多くの読者を得ようと努めたことは、ヴォルフの次の手紙からも明らかである。すなわち、ヴォルフは1913年4月28日にトラークルに宛て「来週、私は若い作家の作品を一冊80ペニヒという廉価で刊行します。それらの作品は——集団や流派には属していませんが——我々の時代の固有成りかつ強力な表現であるという共通点をもっています」¹⁶⁾と述べていた。これによれば、先のピントゥスの回想では、『Der jüngste Tag』は「人気を博していたインゼル叢書に対抗して」企画された¹⁷⁾と述べられていたが、その叢書が数々の点で手本にしていたのは、P・ラーベも指摘するように¹⁷⁾、「頁数が少なく、短時間で読み終えることができ、価格も安く、普及し易い冊子の形式をとり、内容は抒情詩を主とした」A・R・マイヤーの刊行した叢書『Lyrische Flugblätter』であったと思われる。

『Der jüngste Tag』は1913年5月の刊行開始から1921年の刊行終了までに合計86点の最新の文学作品を発行した。そして、第一回の配本では、No.1 ヴェルフェル『誘惑』、No.2 ハーゼンクレーヴァー『果てしない対話』、No.3 カフカ『火夫・或る断篇』、No.4 ハルデコップフ『夕べ・或る小対話』、No.5 E・ヘニングス『最後の歓喜』、No.6 C・エーレン

シュタイン『ある少年の嘆き』の6点が刊行された。No. 1とNo. 2の作家がヴォルフ出版社の企画顧問であったことは、この叢書に対する出版社の大きな期待と強い責任感を示していた。しかしながら、この二人の作家とNo. 3のカフカはそれ以前にヴォルフ出版社から作品が刊行されていたし、またヴェルフェルとカフカは先述の年鑑『Arkadia』にも作品が収められていたので、すでに名前の知られた作家であった。これに対して、No. 4、No. 5、No. 6の作家は若く、それ以前に作品が刊行されたこともなく、その叢書によって初めて世に紹介されたのであった。そして、第二回に配本されたNo. 7/8のトラークルの『詩集』も、彼にとってはそれが初めての作品刊行であった。この詩集を刊行するために、ヴォルフは——かつてローヴォルトがハイムに行ったと同様に——1913年4月1日にトラークルに手紙を書き、原稿を送るように依頼した。これに対して、トラークルからは早くも1913年4月中旬にヴォルフのもとに原稿が送られてきた。

c) 発展と影響

『Der jüngste Tag』は、1914年5月にNo. 17まで、1915年末にNo. 24まで、そして1916年末にNo. 36まで刊行された。これによれば、その叢書は戦時中にもかかわらず些か速いペースで刊行されていたことが判る。ヴォルフは戦争が勃発すると同時に戦地に赴き、ほぼ二年間、出版社から離れていた。しかし、その間に彼の代理を務めていたG・H・マイヤーの努力によって、その叢書の刊行は滞ることがなかった。こうして、戦争が終結したときには、No. 60/61まで刊行されていた。戦争中も、『Der jüngste Tag』はヴォルフ出版社の活動の中心に位置し、重要な役割を果たしていた。

こうした背景から、1916年には表題が『Der jüngste Tag』と類似した年鑑『Vom jüngsten Tag - Ein Almanach neuer Dichtung』が刊行された。その年鑑は、そこに収めていた作家30人のうち19人が叢書『Der jüngste Tag』の作家であったことから明らかなように、叢書『Der jüngste Tag』と深い繋がりをもっていた。

d) 発行部数に表れた普及状況

すでに1916年に、初期に刊行された作品の多くが絶版になり、第二版が発行されることになった。そして1917年からは、いくつかの作品で第三版が発行されることになった。しかもこの第三版では、発行部数がそれ以前の版よりも多く設定されていた。重版の際に印刷する部数は各作品によって異なるために、重版の回数のみで各作品の普及状況を捉えることはできない。たとえば、この叢書に5点の作品が収められていた人気作家シュテルンハイムの場合、初期に刊行された3点の作品の発行部数がいずれも八千に達していたので、4点目の作品のNo. 26『メータ』は、初版で一万部が発行された。こうした状況からも、各作品の発行総数を正確に把握することは困難であるが、ごく一部の詩集を除いて、ほとんどの作品が初版以降、二年ないし三年で版を重ねていた。いずれにせよ、こうした重版状況は『Der jüngste Tag』の人気の高さを物語るものである。その叢書には、シュテルンハイムのように、すでによく知られた作家も収められていたが、ほとんどが若く、まだ固定した読者を得ていなかった作家であった。それゆえに、そうした作家の場合、この叢書以外で作品が刊行されたとしたら、せいぜい数百部の発行に留まっていたことだろう。実際、この叢書に収められたカフカの3点の作品は、いずれも発行部数が一万に達していたが、この叢書以外で発行された作品は、たとえば『流刑地にて』は僅か千部、『田舎医者』でも二千部足らずの発行であった。しかしながら、1923年以降は、この叢書の絶版になった作品ももはや重版されることはなかった。このために、『Der

『Der jüngste Tag』は今や歴史的な叢書の部類に入ることになった。

e) 収められた作家と作品

『Der jüngste Tag』の成功は、刊行する作家と作品を特定の文学傾向や作家集団に限定しなかったというプログラムの開放性にも因っていたと思われる。すなわち、無名の若い作家にとっては、先ず雑誌が唯一の発表の場であったので、彼らは多くの雑誌に寄稿していたが、刊行する作家の選定に当たって特定の雑誌を重視したり、各雑誌の同人的集団を考慮したりしなかった。ちなみに、『Der jüngste Tag』の作家たちと彼らが寄稿していた雑誌の繋がりには以下のようであった。

i) H・ヴァルデンが発行した『シュトゥルム』に寄稿していた作家：ベン、ブラス、プロート、A・エーレンシュタイン、ゴル、ハルデコップフ、ユング、クノープラウホ、ココシュカ、レーオンハルト、ロッツ、ミュノーナ、ルービナー、シッケレなど。

ii) F・プェムファートが発行していた『アクツィオン』は、現代思潮の伝達を主眼にしていたこともあり、当時、多くの作家が寄稿していた：バウム、ベッヒャー、ベン、ブラス、ボルト、プロート、エートシュミット、フレッシュ=ブルニンゲン、ゴル、ハルデコップフ、ハーゼンクレーヴァー、ヘニングス、ヘルマン、ユング、カイザー、クラフト、レーオンハルト、マティアス、ミュノーナ、オッテン、ルービナー、シッケレ、シュテルンハイム、ヴェルフェル、ヴォルフエンシュタインなど。

なお、i)、ii) で挙げた作家たちは、短期間のみ発行されてた『Revolution』と『Die Neue Kunst』にも作品を発表していた。つまり、『Revolution』は1913年10月15日に創刊し、早くも1913年12月20日に廃刊するというきわめて短期間の発行であったが、寄稿者たちはその雑誌を『アクツィオン』の兄弟誌と見做して、連帯感を深めていた。また、『Die Neue Kunst』も1913年7月25日に創刊し、1914年3月3日に廃刊するという短命の雑誌であったが、ミュンヘンにおける表現主義の活動拠点としての意味をもっていた。

これによって、『Der jüngste Tag』は、実際、特定の雑誌の寄稿者ではなく、さまざまな雑誌の寄稿者を採り入れていたことが明らかになった。さらに上記の雑誌以外にも、『Hyperion』、『Die Argonauten』、『Saturn』、『Neue Jugend』などで活躍していた作家も収められていた。

そしてまた、『Der jüngste Tag』は国や都市による作家の限定もしていなかったのだから、次に見るように、ヨーロッパ諸国の作家も収められていた。フランスの作家からはジャム、バレス、シュウォブ、クロードルが収められ、プラハの作家集団からは——ヴォルフ出版社の企画顧問をしていたヴェルフェルを介して——カフカ、プロート、ウルツィーディル、バウムなどが収められていた。さらに、このプラハの作家集団との関係から、プレズィナ、チャペックなどチェコの作家も加わるようになった。そして、ウィーンの作家集団からは、エーレンシュタイン、フィアテル、この都市で育ったココシュカ、さらに——ココシュカとエーレンシュタインを介して——『Der Brenner』の同人であったトラークルも入っていた。このほか、スウェーデンのストリンドベリ、ロシアのレーミゾフも収められていた。

ヴォルフは出版人として数多くの雑誌や年鑑を読んでいた。彼は——ヴィルヘルム・ワイン酒場やカフェで作家を見出したのではなく——原則として、雑誌や年鑑で彼が刊行すべき作家や作品を見出していた。こうした事情から、『Der jüngste Tag』は、雑誌で部分的にしか発表されなかった作品を今や完全な姿で紹介し、その作品のもっている意義を十分に発揮させることに寄与したが、そのみならず雑誌に埋没してしまう恐れがあった小作品をより多くの読者

の目に触れるように救出する役割も果たしたのである。

しかしながら、雑誌との関係を考える際に注目されることは、『Der jüngste Tag』に収められた作家のほとんどが、1913年9月にライプツィヒのヴァイセ・ビュヒャー出版社から発行された月刊誌『Die Weissen Blätter』の寄稿者であったことである。換言すれば、『Die Weissen Blätter』の寄稿者のほとんどが、のちに『Der jüngste Tag』で作品が刊行されたのである。このように、『Der jüngste Tag』は『Die Weissen Blätter』ときわめて近い関係にあった。これについては、ヴァイセ・ビュヒャー出版社を設立したE・E・シュヴァーバハがヴォルフの友人であり、一時、ヴォルフ出版社の企画顧問も務めたことがあったので、ヴォルフがその出版社の本の制作、宣伝、販売などを代行していたという事情があった。こうした背景から、ヴォルフは『Die Weissen Blätter』に掲載されていた作品を復刻、転載する権利を優先的に得ていたのみならず、その雑誌の編集についても発言力をもっていた。このような両者の協力関係は、ヴァイセ・ビュヒャー出版社の経営が1917年10月にヴォルフの手に移ったこともあり、以後も続くことになった。ちなみに、『Die Weissen Blätter』は『アクツィオン』や『シュトゥルム』と並んで、表現主義の文学運動を主導する雑誌になったが、そのプログラムは次に見るように、若い世代の発言の場としての役割を強調していた。すなわち、「あの『Neue Rundschau』が年配の世代（die ältere Generation）の発言の場であったのと同様に、『Die Weissen Blätter』は——以前に『Insel』や『Hyperion』に寄稿していた数人の作家をも加えて——比較的若い世代（die jüngere Generation）の機関誌であらねばならない。『Die Weissen Blätter』は生のあらゆる実状と現代に特有の現象に注目することで、読者に円熟した創作と成功した作品を教示することだろう。『Die Weissen Blätter』は、現代生活のいかなる領域をも態度決定なしで通り過ぎることはないだろう。それは新しい世代（die neue Generation）の芸術的表現であるのみならず、その道徳的、政治的な表現でもあろうとする」¹⁰⁾と。

そして第一号では、ブロート、オイレンベルク、C・シュテルンハイム、ヴェルフェル、ヒラー、ハーゼンクレーヴァー、ブライ、シッケレ、ツェヒ、O・ピックなどヴォルフ出版社とヴァイセ・ビュヒャー出版社に関係していた作家たちが執筆者になっていた。

f) 他の叢書との競合／模倣の出現

ヴォルフ出版社が『Der jüngste Tag』の刊行を始めて間もなく、他の出版社からも新しい文学を叢書で刊行する試みが次々と現れた。たとえば、『シュトゥルム』の出版社からは1914年6月以降、叢書『Sturm-Bücher』が刊行された。『アクツィオン』の出版社からは、叢書として1916年に『Aktions-Bücher der Aeternisten』と『Aktions-Lyrik』が、また1917年には『Der rote Hahn』が刊行された。ちなみに、『Aktions-Lyrik』は装丁が『Der jüngste Tag』のNo. 19からNo. 24までに非常に類似していた。そして、『Der rote Hahn』には『Der jüngste Tag』に収められていた作家の数人が収められていた。このように競合と模倣が活発化するなかで、終戦直後とそれ以降には、さらに多くの叢書が刊行された。たとえば、ミュンヘンのローラント出版社からは『Die Neue Reihe』が刊行されたが、この叢書にも『Der jüngste Tag』の作家が数人収められていた。このほかに、ハノーファーのシュテーゲマンが出版した『Die Silbergäule』、ドレスデン出版社が刊行した『Das Neuste Gedicht』、『Dichtung der Jüngsten』などの叢書が挙げられる。このうち『Dichtung der Jüngsten』は、その表題にも窺われるように、『Der jüngste Tag』を強く意識し、これと競合する姿勢を示していたと思われる。

これらの叢書と『Der jüngste Tag』を、収められた作家と作品について、また編集理念や刊行目的に関して比較することができれば、『Der jüngste Tag』がどの程度それらの叢書に影響を及ぼしていたかを明らかにすることができ、興味深いことだろう。しかしながら、それらの叢書に共通して謳われていた「若い無名の作家のための発表の場」という役割と刊行目的は、疑いもなく『Der jüngste Tag』の成功によって広く世に認められるようになった理念であった。

VIII) 1913年2月にローヴォルト出版社の建物を譲り受け、従業員三人で営業を始めたヴォルフ出版社は、その年のうちに従業員も十五人に増えた。このために、1914年初め、同社はライプツィヒのクロイツ通り3bへ移転し、そこで最初の出版年鑑である『Das bunte Buch』を刊行した。この年鑑に収められた作品は、ほとんどが初めて発表されたものであったが、その作家たちは（フランスの批評家シュアレスを除いて）すでに1913年末までにヴォルフ出版社から作品が刊行されていた。そして、作家たちの出身はドイツ語圏の国のほか、ロダン、ゾラ、ボードレル、ヴェルレーヌ、ジャム、シュアレスがフランス、ブレヰナがチェコ、パスクリがイタリアというようにヨーロッパ諸国に及んでいた。こうした多彩な顔ぶれと豊富な内容の年鑑であったが、その最初と最後にはヴォルフ出版社の企画顧問でもあったヴェルフェルの詩が掲載されていた。さらに、この年鑑には1910年から1913年までにローヴォルト出版社とヴォルフ出版社から刊行された本の完全な目録（147p～207p）が付いており、そこには170以上の作家名が記載されていた。その目録から明らかになることは、すでに1913年までにかなり多くの表現主義の作家がヴォルフ出版社から作品を刊行されていたこと、しかも彼らは、プラハの作家集団、ウィーンの作家集団、プェムファートを中心に集まった作家たち、さらにはF・ブライが発行した『Der lose Vogel』の同人というように、（『シュトゥルム』のグループとダダイストを除いて）表現主義の文学運動を支えた主要な作家たちであったことである。ちなみに、その年鑑は最初、『幸福を運ぶ船』という表題を付ける予定だったというが、1914年春までのヴォルフ出版社の発展と成功を見れば、その年鑑が同社の活動の輝かしい成果を記録したものにほかならなかったことは明らかである。

戦争が勃発すると同時に、ヴォルフとピントゥスはそれぞれ戦地へ赴くことになり、1916年9月にヴォルフが出版社に戻ってくるまで、G・H・マイヤーが代理を務めていた。しかし、その間もヴォルフ出版社の作家たちが他の出版社へ移ることはなかった。ヴォルフがかつてシッケレに語っていたような彼の出版人としての信条が、作家たちとの間に堅い信頼関係を作り出していたからである。つまり、ヴォルフは「個々の本、個々の作品を出版することが私の目的ではない。こう言っても、私が個々の作品を過小評価しているなどとは思わないで欲しい。私は昔から、出版人として、作家を育て、作家を世に送り出すことをより重要に思っている」¹⁹⁾と述べていたのである。実際、彼の出版社の出版目録を見ると、ヴォルフのこの言葉を裏付けるように、たとえば1917年までにヴェルフェルは6点、ハーゼンクレーヴァーは4点、ブロートは9点、シュテルンハイムは12点というように、同一作家の作品が何点も出版されていた。そして、1916年には、表現主義の若い作家たちの精神的支柱であったH・マンがヴォルフ出版社の作家に加えられた。H・マンの意義と価値を確信していたヴォルフは、出征地バルカンから手紙でマンと連絡を取り、彼の小説集（全12巻）の刊行を準備した。このH・マンの作品集の刊行について、ヴォルフはリルケに宛ててこう書いていた。「私は『女神たち』も『小

さな町』も好きです。八年あるいは十五年経っても七千五百万のドイツ人のうち六千人の読者も見出せなかったこれらの作品が、一年のうちに何十万人もの読者を見出すなら、それは大きな喜びです。こうした結果が、ランゲン、カッシーラ、インゼルといった先輩出版社に対して非礼な行為にあたるだろうか？²⁰⁾と。さらに、H・マンの作品は1916年に刊行が始まった同社の画期的な小説シリーズ『Der Neue Roman』にも7点が収められた。

IX) 1916年春、叢書『Der jüngste Tag』の表題と類似した表題の年鑑『Vom jüngsten Tag—Ein Almanach neuer Dichtung』が刊行された。この年鑑の刊行は、『Der jüngste Tag』の、今までに刊行された作品と今後刊行が予定されている作品については、本年末に刊行される年鑑で見解が示されるだろう」と予告されていたことから、叢書『Der jüngste Tag』と密接に関連していた。すなわち、あの叢書『Der jüngste Tag』は、頁数が少ない冊子に小作品を収めてはいたが、当時のさまざまな文学潮流を横断して紹介しており、この先駆的役割と画期的意味をもってヴォルフ出版社の活動の中心に位置していた。それゆえに、その出版社の年鑑として表題にその叢書の表題を採り入れていたことは理に適ったことであつたかもしれない。この年鑑の刊行目的については、「序文」で次のように記されている。「本書は、新しい詩人の作品から代表的な箇所を抜粋しており、最近の文学（die Dichtung jüngster Tage）の手引き書として考えたものである。綱領による結びつきや、特殊な作家集団の多少とも私的な行動などが重要視されていないことは、本書に収められた作家のさまざまな名前を見れば分かるだろう。この年鑑は戦争を〈反映しよう〉とするものではない。しかし、戦争直前に発展し始めた若い文学（die junge Dichtung）を戦争を経て、新しい創造と大きな責任のある未来の時代へ導いて行くことを望んでいるがために、敢えて戦争中に刊行されるのである²¹⁾と。この年鑑に収められている30人の作家の——タゴール、プルファー、マイリンクの3人を除く——すべてが表現主義の作家であり、さらにそのうち19人が『Der jüngste Tag』に収められていた作家であつた。

この年鑑は、初版の一万部がたちまち売り切れたので、1916年11月に（発行年を1917年と記載して）改訂・第二版が発行されることになった。この第二版は、頁数については初版より七頁ほど減少し、内容についてはおもに次の点が異なっていた。すなわち、先に紹介した一頁分の「序文」と、「三人の死者」の章の冒頭に記された「死者たちを心に刻みつつ、私たちは生を迎え入れる」というRic. フーフの言葉が削除された。また、ボルト、クラフト、マイリンク、プルファー、フィアテル、ツェヒの作品のすべて、ブロートの一篇の詩とシッケレの四篇の詩も削除された。そして、グラス、ベッヒャー、ハーゼンクレーヴァー、ラスカー=シューラー、ヴェルフェルについては詩の一部または全部が別の詩に差し替えられた。そして、新たにH・マンの散文〈兄弟〉が収められた。さらに、この改訂・第二版には「同時代の造形芸術の卓越した表現主義の例」としてベルンハルト・ヘトガーの彫刻の複製とココシユカの絵が掲載された。この改訂・第二版も25人の作家のうち16人が『Der jüngste Tag』の作家であつた。この第二版が発行された1916年には、ピントゥス、ハーゼンクレーヴァー、ヴェルフェルは戦地にいたために、A・エーレンシュタインとベッヒャーがヴォルフ出版社の企画顧問を努めていた。²²⁾ こうした事情に拠るのであろうか、エーレンシュタインとベッヒャーは、この年鑑の二つの版に作品が収められていたし、またこれと同じ時期にそれぞれ二点の作品がヴォルフ出版社から刊行されていた。

しかしながら、とくに注目されるのは、この年鑑において戦争に対するヴォルフ出版社の態度がおもに次の点に表されていたことである。すなわち、初版と第二版には、戦争が勃発した1914年に早くも戦争の犠牲になったシュタードラーとトラークル、また1912年に事故死したハイムの代表的な詩と彼らを追悼する文が「三人の死者」と題した章の下に収められていた。それゆえに、この年鑑はとりわけ「三人の死者」の章で戦争の悲惨さを訴え、戦争に反対するヴォルフ出版社の態度を表していたと見ることができる。これと関連して、ヴォルフ出版社と関係があったM・ブーバー、ローヴォルト、ハーゼンクレーヴァー、ピントゥス、ツェヒ、レーオンハルト、エーレンシュタイン、H・E・ヤーコプが早くも大戦が勃発した1914年の大晦日に「戦争を速やかに終結させるために」ワイマールで会合をもったことが思い出される。

X) 1917年、1918年には、ヴォルフ出版社から年鑑が立て続けて刊行された。まず、1917年には、『Der jüngste Tag』を内容面で補うために、年鑑『Der Neue Roman』が三万部発行された。これは、『Der jüngste Tag』が頁数の少ない小冊子の形で刊行されたために、おもに短篇小説、対話、詩、小戯曲を収め、長篇小説を収めることができなかったという状況を改善するために刊行された。

そして1918年には、先述の年鑑『Vom jüngsten Tag』の改訂・第二版での「本書は、比較的若い詩人世代の代表的な（創作方法の特徴を示した）作品を何篇か収集したものである。しかし、ヴォルフ出版社が刊行した些か多い作品のごく少数しか収めていない。本書に収められていない作品は、1918年に発行予定の新しい収集本に収められることだろう」²³⁾ という予告に基づいて、次の二冊の年鑑がそれぞれ一万五千部発行された。

その一つは、年鑑『Die Neue Dichtung』である。これは、表現主義の文学領域における出版活動を広く紹介しようとしたものであり、ベッヒャー、ベン、ハーゼンクレーヴァー、カフカ、レーオンハルト、H・マン、ピントゥス、トラークル、ヴェルフェルなど表現主義の代表的作家の作品が、L・マイトナーの九枚の絵と共に収められていた。

他の一つは年鑑『Das Neue Geschichtenbuch』であり、そこにはプロート、エートシュミット、H・マン、ミュノーナなどの作品が収められていた。

これらの年鑑は戦争中に刊行されたが、いずれも当時としては発行部数がかかなり多く、ヴォルフ出版社の出版物に対する社会の関心の高さを物語るものであった。

しかしながら、これらの年鑑が社会に好評をもって迎えられたとき、戦争が終結することになった。この頃、ヴォルフは、それまで彼が支援してきた新しい文学の創造的な力が次第に衰えてゆくのを感じた。すなわち、戦争中には、彼の出版社の刊行した本がしばしば検閲にひっかかって発禁の憂き目を見たり、刊行した戯曲も上演は終戦後まで待たねばならないといった不運が続いた。こうした状況の下で、大戦前に大きく発展していた文学運動の勢力も、大戦中に募った無力感や喪失感のために次第に衰退せざるを得なかった。表現主義の終焉が方々から囁かれるようになった1919年10月、ヴォルフ出版社は約六十人の従業員と共にミュンヘンへ移った。そして1921年、ヴォルフはヴェルフェルに次のように語り、彼が支援していた表現主義の文学に別れを告げることになった。つまり、「すでにきみに語ったことですが、きみの世代——それはまた私の世代でもあるのですが——には、若い後継者が育っていなかったことがいっそう強く感じられます。どれほど注意深く周囲を見回しましても、何も見当たらないの

ですから。ドイツの文学は深刻な不毛状態に陥ってしまったように思われます」²⁴⁾ と。

XI) 以上において、出版人クルト・ヴォルフと彼の周りに集まった作家たちが共に展開した文学活動を、おもにその間に刊行された作品、年鑑、雑誌を辿りつつ、考察してきた。しかしながら、ヴォルフは彼の出版活動が表現主義の運動と結びつけて語られることに対して、「特定のスローガン、特定の文学傾向を支援したことはなかった」と述べて異議を唱えていた。また、ヴォルフは、彼が刊行した作家たちを表現主義という概念で一括することにも疑問を呈していた。これについて彼は、「表現主義とは集団の表示である。集団は一篇の詩も作り出さない。創造的な活動はつねに個人的なものである」²⁵⁾ と述べていた。P・ラーベの研究によれば、表現主義の概念で捉えることのできる作家は350名近く存在する。しかし、ヴォルフ出版社が作品を刊行した作家はそのうちの代表的存在であり、それらの作家は表現主義という一つの文学潮流ではとうてい捉えることのできない大きなスケールと強い個性をもっていた。それらの作家の豊かな想像力は、——たとえ時間的な距離が広がるにつれて、同じ時代に創作していた彼らに共通した特徴が次第に明確になってこようとも——表現主義という文学史の分類に収まるものではない。しかしながら、本稿で見たように、出版社とそれが刊行した叢書や雑誌などが、実際に共同体を形成する力をもっていた状況にあって、ヴォルフは名高い叢書『Der jüngste Tag』や数々の年鑑の刊行によって、また『Die Weissen Blätter』の発行を通じて、当時の文学運動の集団形成に深く関わったのである。そしてまた、ヴォルフ出版社が作品を刊行した作家たちは、新しい世代、若い文学共同体、新しい文学運動を自覚し、その共同体の意識は各々の創作に強く反映されることになったのである。もちろん、そうした状況を——たとえ表現主義という概念を拡張したとしても——簡単に表現主義と同一視することはできないだろう。しかし、それにもかかわらず、そうした文学的状况はさまざまに表現主義と接合し、ヴォルフによって作品が刊行された作家たちは、その文学の形式、内容、信念において表現主義と関係したのである。さらにまた、刊行する作家と作品の選定、企画の決定はヴォルフと企画顧問との協議に拠っていたが、企画顧問であった詩人のハーゼンクレーヴァー、ヴェルフェル、批評家のピントゥスが表現主義の特徴を表した文学を理解し、それを世に紹介する義務を担っていたことも、ヴォルフ出版社の活動が表現主義と関係する大きな要因になっていたのである。

しかしながら、ヴォルフの出版人としての信念が表現主義の作家たちの芸術理念と少なからず合致していたことは、彼の次のような発言にも表れていた。すなわち、ヴォルフはK・クラウスに宛てて「出版人とは、精神の震動を本質的に記録しようとする地震計のようなものです。私は、自分が聞き取る時代の発言が——私に価値あるものと思われる限りにおいて——一般にも広く聞かれ得るために、それを書き留め、大衆の討議に供したいと思います」²⁶⁾ と述べていた。また、彼はリルケに宛てて「私が二十歳の情熱をもって、突然、出版人という職業に身を捧げる決心をしたとき、(……) 私の心を駆り立てたのは、同時代の詩人たちの集団に加わることはありませんでした。たしかに、それもありませんでしたが、それ以上のものがありました。つまり、それは、私が大切にしていたもの、私が重要で今日的で真正と見たもののために、強い信念をもって働きかけようという意志でした。愚鈍という悪魔と世間に抗して闘争を始めようという意志でした。私の出版社の鏡に現代の精神と心を捕らえ、その像をきわめて忠実に、時代の諸々の現象、興奮と奇抜な表現、友愛と善意への憧憬、人間への愛、ブルジョアへの憎悪などの多様な面に映し出そうという、最初から抱いていた信念を私はもち続けることができ

ました」²⁷⁾と書いていた。このようなヴォルフの信念こそは、「表現主義とは様式の問題というよりも、むしろ信念の問題であった」²⁸⁾とH・シェフラーが捉えたように、表現主義の文学運動を支えていた作家たちの信念と共通するものであった。

註

- 1) Pinthus, Kurt: Leipzig und der frühe Expressionismus. In: Paul Raabe (Hrsg.), Expressionismus – Aufzeichnungen und Erinnerungen der Zeitgenossen. Olten und Freiburg im Br. 1965, S.78f.
- 2) Pfäfflin, Friedrich: Kurt Wolff. Ernst Rowohlt. Marbacher Magazin 43, 1987, S.95.
- 3) Pinthus, Kurt: op. cit. S.79.
- 4) Schuhmann, Klaus: Walter Hasenclever, Kurt Pinthus und Franz Werfel im Leipziger Kurt Wolff Verlag (1913–1919). Leipzig 2000, S.38.
- 5) ibid. S.39.
- 6) ibid. S.40.
- 7) Schneider, K. L. (Hrsg.) : Georg Heym – Dichtungen und Schriften, Bd.3. Hamburg und München 1960, S.222.
- 8) Raabe, Paul (Hrsg.) : Die Zeitschriften und Sammlungen des literarischen Expressionismus. Tübingen 1964, S.124.
- 9) ibid. S.13.
- 10) Schöffler, Heinz (Hrsg.) : „Der jüngste Tag“ – Die Bücherei einer Epoche. Bd. 7, Frankfurt/M. 1981, S. 3362.
- 11) Dietz, Ludwig: Kurt Wolffs Bücherei „Der jüngste Tag“. Seine Geschichte und Bibliographie. In: 〈Philobiblon〉, 7, H 2, 1963, S.96–118 に拠った。
- 12) Pinthus, Kurt: op. cit. S.82.
- 13) Zeller, Bernhard und Otten, Ellen (Hrsg.) : Kurt Wolff. Briefwechsel eines Verlegers 1911–1963. Frankfurt/M. 1980, S.77.
- 14) Raabe, Paul (Hrsg.) : Die Zeitschriften und Sammlungen des literarischen Expressionismus. S.145.
- 15) ibid. S.144.
- 16) Zeller, Bernhard und Otten, Ellen (Hrsg.) : op. cit. S.80.
- 17) Raabe, Paul (Hrsg.) : Die Zeitschriften und Sammlungen des literarischen Expressionismus. S.11.
- 18) ibid. S.48.
- 19) Zeller, Bernhard und Otten, Ellen (Hrsg.) : op. cit. S.209.
- 20) ibid. S.148.
- 21) „Vom jüngsten Tag“ 1. Auflage. Leipzig 1916, S.1.
- 22) ピントゥス、ハーゼンクレーヴァー、ヴェルフェルのほか、1914年春からヴィリ・ハースも短期間、ヴォルフ出版社の企画顧問を務めた。ハースは『文学的回想』のなかで「ヴォルフ出版社で企画顧問を務めることは、当時、大流行であった」と述べていた。1916年には、エーレンシュタインとベッヒャーも同社の企画顧問を務めていた。なお1916年には、ブロートも手紙で企画顧問への採用をヴォルフに依頼していた。また1917年には、カフカも「結婚してプラハを去る予定ですが、ヴォルフ出版社の企画顧問に雇ってはもらえないでしょうか？」とヴォルフに手紙で尋ねていた。(Vgl. Zeller, Bernhard und Otten, Ellen (Hrsg.) : op. cit. S.180/S.43.)
- 23) „Vom jüngsten Tag“ 2. veränderte Ausgabe. S.4.
- 24) Zeller, Bernhard und Otten, Ellen (Hrsg.) : op. cit. S.344.
- 25) Raabe, Paul (Hrsg.) : Expressionismus – Aufzeichnungen und Erinnerungen der Zeitgenossen. S.292.
- 26) Zeller, Bernhard und Otten, Ellen (Hrsg.) : op. cit. S.128.

27) *ibid.* S.147.

28) Schöffler, Heinz (Hrsg.) : *op. cit.* S.3362.